

2020年6月7日(日)

上尾合同教会

聖書 イザヤ書 6章1~3節

ヨハネの黙示録 4章4~8節

説教「黙示録②—聖なるかな、聖なるかな」

武田真治牧師

おはようございます。6月に入りました。いよいよこの6月中には、この礼拝堂で皆さまとお会いできる時が与えられるのではないかと、本当に首を長くして、また期待をもって楽しみにしております。黙示録の説教も4章に入りました。

ヨハネさんが神様からここに上って来いと言って、天へと招かれ、聖霊によって上げられ、天上での礼拝に接するというのが、この4章なんです。旧約聖書、またユダヤ教では、天というのは神様のおられた場所というように考えられていたわけですが、そこで、神様のことを礼拝していたということについて、ヨハネの黙示録ほど明確に天での礼拝を語っている箇所は、ほとんどないと言って良いかもしれません。

先ほど読んでいただきましたイザヤ書第6章に、預言者イザヤが天上の様子について、神様から示されたということが出て参りました。有名な箇所です。もう一度読みます。旧約聖書1069頁。イザヤ書6章1節~3節。「ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。彼らは互いに呼び交わし、唱えた。『聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。』」

イザヤが天からの啓示を受ける場面ですね。そして、天には玉座があって、そこには主なる神様が座しておられる。その周りにセラフィム、天使のような存在が大きな声でその玉座におられる神様を讃美して「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主」と。次の4節には、「この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。」とあります。大きな地震が起こったということでしょう。そのことによって、5節。「わたしは言った。『災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た。』」イザヤが恐れるんですね。そして、私は天の万軍の主を見てしまったと。でもこのあとイザヤは神様から預言者として任命されていくと、話が連なっていきます。

今、読んで参りました天上での様子を表す数少ない旧約聖書の箇所の一つですが、ここでは明確に礼拝をしているとは出てこない。セラフィム、天使のような人たちが、神様を讃美している。それが、今日のヨハネの黙示録第4章1節から。(457頁)「その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラツパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。『ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう。』わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている

方がおられた。その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。玉座からは、稲妻、さまざまな音、雷が起こった。また、玉座の前には、七つのともし火が燃えていた。これは神の七つの霊である。また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があつた。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があつた。彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、／全能者である神、主、／かつておられ、今おられ、やがて来られる方。』

イザヤ書のセラフィムと呼ばれていた天使のような存在が、ヨハネの黙示録でも、玉座の周りに四つの生き物がいて、六つの翼があり、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と讃美していた。イザヤ書とよく似ている。共通している部分がたくさんあります。

同じものをヨハネも目撃したということじゃないでしょうか。天における四つの生き物が天において神様を讃美しているというのは、エゼキエル書第 1 章にも出てきます。そこでは、ケルビムと言われています。四つの生き物、そして黙示録と同じように、獅子、牡牛、人間、鷲の四つの顔を持っていたというのも出てきます。おそらく、イザヤもエゼキエルも、新約聖書のヨハネも、同じものを神様の周りで、天において目撃しているということではないでしょうか。おそらく、神様の周りにいて、神様に仕える。ある人はそれを天使、御使いと言ったり、あるいはそれがミカエルだ、ガブリエルだと、そういう名前を付けて呼ぶ方もあります。ヨハネの黙示録では、敢えて名前は出てきません。イザヤはセラフィムといい、エゼキエルはケルビムと申しましたけれども、ヨハネは敢えて名前を付けてはいません。ただ、決定的にエゼキエル、イザヤとヨハネが違っている点は、そこに加えて、24 人の長老たちが居たとありました。

4 節。「また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。」この長老という言葉、ギリシャ語では元々は<プレスビューテロス>という言葉です。これは、旧約聖書にも出て参ります。ヘブライ語で、<ザーケン>という言葉です。それと同じだと考えられています。

旧約聖書の<ザーケン>は、元々は<ザーハー><あごひげ>という言葉から来ている言葉なんです。長老というのは、名前の通り、長く生きている年取った者。立派なあごひげを蓄えてい

る人物ということで、<ザーケン>と呼ばれた。

ここで大事なことは、黙示録は、天上の礼拝に神様と天使と加えて、天上には人間が居るんだということです。これはとっても大事なことなんです。言い換えるならば、私どもの信仰とか希望とかは、この一点にかかっているとっていいかも知れません。天上において、神様の玉座があって、そこにはもちろん天使的な存在もいるのですが、同時に人間もそこに同席することが許されているのだ。

そして、「聖なるかな、聖なるかな」と天使たちが讃美をするのと同じように、聖書の箇所、少し先のところですけども、9 節から「玉座に座っておられ、世々限りなく生きておられる方に、これらの生き物が、栄光と誉れをたたえて感謝をささげると、二十四人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出して言った。『主よ、わたしたちの神よ、／あなたこそ、／栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、／御心によって万物は存在し、／また創造されたからです。』」ここに明らかに讃美をし、礼拝をするんだ。ひれ伏して礼拝をしている。神様を讃美すること、礼拝することが許されているのだ。そうヨハネは私たちに教えてくれているわけなんです。

礼拝であるということを考えます時に、確かに礼拝する対象である神様が、何を拝むか、礼拝する対象ですね。それが大事なわけです。しかし、礼拝がそこで礼拝と呼べるようになるには、神様を讃美し跪いて神様を礼拝する者がそこに存在していて、一緒に居て、初めて礼拝と呼べるのではないかと思います。

新型コロナウイルス対策として、礼拝の自粛をすることになって、各家庭で礼拝をすることになった。牧師である私が説教を録音して、それを各家庭で聴きながら礼拝をすることになったわけです。それでは、教会での礼拝はどうするかという話になりました。最初は、牧師一人だけがここに立って礼拝をしようとしていたんですね。ここに立って説教を語れば、それで礼拝が成り立つ。しかし、長老さんたちが、「いや、先生。それは礼拝とは言えないんじゃないですか。礼拝をする者たちが、二人、または三人、そこに居て、説教を語る者と聞くものがそこに居て、初めて礼拝が成立するのではないですか。」と。「それに先生、寂しいでしょう。」とか言われまして、「じゃあ、長老さんも一緒に礼拝をしましょう。」さすがは長老さんだと思いました。まあ、あごひげは生えていませんけれども、長老さんが全員がウイルスにかかっては大変ですから、分けて教会の礼拝は一緒に守ることになったわけでありまして。

ここもそうなのでありまして、神様だけが存在する、あるいは天使のような存在が讃美する。そ

れで礼拝か。それは、私たちの言葉でいうならば、神様を拝するもの、私たち人間がそこに存在するのだと。それでこそ、礼拝がそこに成立するのではないか。ヨハネの黙示録のヨハネは、まさに天上の礼拝を見たわけです。そこに、人間が居る。私たちが居る。それが、彼にとっては重要であって、それを私たちに伝えようとしてくれているわけです。

ただここまでの話を聞いてこられた方の中に、もしかしたら、天上の礼拝に加わっていた 24 人の長老だけかと、24 人しか入れないのかと。自分はその 24 人の中にとても入れない。私自身も無理だと思いますけれども、そうお考えになる方がおられるかもしれないと思います。でも安心してください。

黙示録を 1 ページめくっていただきまして、第 5 章 11 節を見てください。(458 頁)「また、わたしは見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。天使たちは大声でこう言った。」この<天使たち>というのが、実は私たちのことではないかと言われています。

それでも、自分は天使にもなれないと、そういう疑り深い方がおられるかもしれません。そういう方には、第 7 章 9 節から。(460 頁)「この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、／小羊とのものである。』」この小羊とはキリストのことです。讚美をするわけですね。これは明らかに、私たち自身。<あらゆる民族><数えきれないほどの大群衆>が、この天上の礼拝に加わることができるのだ。すばらしい光景ですね。まさに黙示録が私たちに伝えたい、伝えてくれている重要なメッセージなんです。天上で、まさに私たちが神様を、キリストを礼拝するのだ。

ヨハネさんは、この時パトモスという小さな島にある牢獄に囚われておりました。おそらくキリスト教の伝道をし、当時のローマ皇帝の礼拝に加わらなかったということで、牢屋に囚われていたと考えられます。当然礼拝に出かけることなど、とても無理でした。それだけでなく、牢屋の中で個人的な礼拝、家庭礼拝をしている。そんな個人的な、あるいは一人で礼拝をする。それさえも許してもらえない状況にあったのではないかと考えられています。讚美歌なんかとても歌えない。そして、このまま死を迎えることになるのかも知れない。そのことも充分予想できる状況でありました。

そのヨハネさんに対して、神様は天から<ここに上って来い>と、そして聖霊で彼を天へと連れ出して、天での礼拝を神様はヨハネに見させる、啓示する。いつか、あなたもこの天上での礼拝に

加えられるから、大丈夫だよと。

今、礼拝を持ってない、自由に讚美もできない、そういう状況にあるからといって、やけにならないで、忍耐を持って生き抜いて欲しいという神様からのメッセージではなかったのか。いつか、この天上での礼拝に加わることができるんだ。これは、まさにコロナウイルスによって、礼拝の自粛を求められている私たちにもそのまま通じる神様からのメッセージではないでしょうか。そう思いますがいかがでしょうか。

その上で、もう少し、一つ一つを見ていきたいと思います。ヨハネの黙示録第 4 章 4 節(457 頁)「また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。」

なぜ 24 人なのか。いろんな説があります。旧約聖書のエルサレムでの神殿礼拝。それを直接取り仕切った祭司が、24 組に分かれて、香を焚くとか、礼拝をすとか、そういう担当があった。その 24 組、24 人だったと。そうするとこの長老は、いわば天の礼拝に奉仕をする役目ですね。まさに<サービス>礼拝をする者たちのことだと。礼拝のいろんな役割を担う者たちではないか。

あるいは、他の解釈では、旧約聖書の 12 部族の代表、12 名と、新約聖書のイエスさまのお弟子さん 12 弟子と合わせて、24 名なのだと。つまり旧約から新約、ユダヤ教からキリスト教になった者も含めて、全ての者の代表者がここに集められた。いろんな解釈が可能なんですけれども、ただ、彼らには玉座の周りに座る椅子が、ちゃんと用意されておりました。白い衣を着ている。これは、天の御国のユニフォームですね。そして金の冠を被っていたとありますから、王様のような存在なんです。ただし地上の有名な王様がここに座るわけではありません。天の御国の基準によって、具体的に礼拝に奉仕するという光栄な役目を与えられた徴が、この金の冠であろうと考えられています。礼拝に奉仕できるんだ。そのことを、冠が与えられていると考えられている。

5 節「玉座からは、稲妻、さまざまな音、雷が起こった。また、玉座の前には、七つのともし火が燃えていた。これは神の七つの霊である。」これはもう、音と光の祭典という感じです。スペクタクルという感じです。稲妻というのは光でしょ。雷というのは音、大きな音なわけです。「玉座の前には、七つのともし火が燃えていた。これは神の七つの霊である。」

これはすでに 7 つの教会の時にも出て参りました。この灯というのは、神様の 7 つの霊なんだ。この霊は何を表すかという、命を生み出す聖霊だというふうに出てきましたね。教会の命、あるいは、クリスチャン一人ひとりの生命、あるいは信仰を燃え立たせる。そういう力を持つ炎・聖霊なんだというんですね。それが象徴しているのが、灯なんだ。灯が燃えているんだ。

これは、おそらく神様の周りには常に新しい命を生み出しているんだよ。それが灯で表されている。そしてそれが、地上に7つの霊として働いていく。教会が信者たちに命を与えていく、力を与えていく、生命力を与えていく。そういうものとして蓄えられていく。それが7つもあるのだということではないかと考えられています。

そして、6節。「また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。」この<水晶>と訳されているギリシャ語が、<クリスタロー>という言葉です。今の<クリスタル>という言葉を我々使いますけれども、あの原語になっています。ここも解説者によっては、「玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。」とあるので、天上から雨が降ってくる。そういう雨や雪のように、そういうものを降らせるための海があって、神様がそれを降らすんだと理解されてきた歴史もあります。

けれども、ここは良く読んでいただければわかりますように、<ガラスの海のようにであった>とあり、海があったとは書いてないですね。<海のようにであった>ということです。透き通ったガラスがはめ込まれているような空間が、神様と玉座の周りがあったんだ。これはおそらく近づけないような空間と考えられますね。神様に直接会う、触れるということができないような空間だった。でも、<水晶に似たガラスの海のようにであった>わけですから、透き通っているわけです。つまり目で見ることはできるという事です。神様を直に目で見る事が出来るけれども、そこに行って触れるということについては、一つの空間と言いますか、それがあるんだという事ではないかと考えられています。なるほどなどと思いますね。

そして、この玉座の中央とその周りに四つの生き物が、あたかもその玉座を守る、番をしているような存在として、生き物が存在しています。「前にも後ろにも一面に目があつた。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。」

解説者の多くは、この四つの生き物が何を表すかということを検討しています。かつては、天体の星座のことではないかと。しし座とか、目がいっぱいあるとありますから、星のことではないか。たくさんの星が瞬いている。そういうことを表しているのではないかと考えられてきましたけれども、今は、そういう風にはあまり読まれません。

なぜここに獅子、ライオンが出るのかというと、これは獣の王様、野の獣の王様のことではないか。雄の牛というのは、飼われている家畜の代表ではないか。そして鷲は、明らかに空を飛ぶものの代表ですね。人間は、被造物の頭とされてきた。いわば、地上に住む全ての生き物の代表と考えられているのではないか。

あるいは、他の解釈ではそれぞれの性質を表すのではないか。ライオンは、もちろん力強さ、最も力の強い者。雄牛は、最も忍耐を持つ、耐える力を持つ者。人間は、最も知性を持つ者であり、鷲は最も速く、迅速を表す。そういう性質ですね。

いずれにしても、この四つの生き物が神様に奉仕するんです。さっきの24人の長老と同じように、神様が行けと言ったら飛んでいくんです。翼があるんです。星座じゃないんですね。星座では飛んでいけませんからね。翼があるということは、動いていく。そして神様が助けよと、その場所に手と足となって神様の業を行う。そのように神様に奉仕することを喜ぶ。だからここで、生き物は特に目が重視されております。

6節後半。「四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があつた。」8節「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があつた。」

何でこんなに目がたくさんいるのか、存在するのか。この目の役割は二つの役割をしていると言われています。一つの役割は、この目は地上を見る目だ。つまり、先ほどの区分けというならば、野の獣ですね。地上の野の獣を見ている者。雄牛、家畜を見ている者。鷲、空の鳥を見ている者。そして、人間たちを見ている者。つまり、ただ、人間だけを見ているのではない。この世界の生き物全部を見ている。神様はそうやって生き物を通して見ていると言ってもいいかも知れない。

そして、大事なことは、そこを見ていて、大変な状況があつたら神様の許しを得て助けに行く存在が、この生き物なのです。それ故、翼があるということではないか。特に、先ほど申しました<玉座の周りにあつた7つの灯>があるでしょ。そこから火を取って、それを聖霊としてこの地上に送るんだ。持ってくるんだ。そしてその火は命を与えるわけですね。

教会、クリスチャン、あるいは人間、生きている全ての者に対して、その聖霊を注ぐんだ。同時にそれは火ですから、今度は逆に裁く火にもなりますね。悪しき状態を裁く。そういう火にも、地上に裁きをもたらすということも、ここには込められているとも言われています。

その意味で、代々の教会ではマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、四つの福音書それぞれに獅子・雄牛・人間・鷲で象徴させてきたという歴史がありますね。それは何かというと、イエスさまによる救いと裁きです。それが、そこで記されているからだというふうにも、用いられてきた流れがある。どうでしょうか。

私たちもそのように守られている。特に、このヨハネの時代は厳しい迫害の時代でした。でも、大丈夫だよと、たくさんの生き物がそれぞれのたくさんの目を持って、一人ひとりが見守られているんだ。大きな励まし、支えになったのではないのでしょうか。

ただもう一つ、この生き物たちが一面に持っている目というのが、役割は二つあると申しました。一つは、地上をくまなく見る目。もう一つ、この目の役割があるんです。何を見ているのか。それは、神様を見ている。神様の一挙手一動を、神様が何を思われ、何をしたいと思われるのか。何をしようとしていらっしゃるのか。それを察知するための、知るため、すばやく察知するために神様の方を見ているんです。

そのためにたくさん目、そしてその神様の思い、意思に応じて自ら動く。手となり足となっていくんだ。これはおそらく天の御使いを表していると考えてよいと思います。四つの生き物というのは、地上にくまなく目を注いで、地上のいろんな状況。大きなことも小さなことも、目を留めて見ているんだよ。同時に神様を見ているんです。神様がどうそれに反応されるのか。行けとおっしゃるのか。いや、待てとおっしゃるのか。その神様をいつも見て、その神様の思いに従って生きようとしているわけです。

4章8節にあるように、「彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。」だから、その目をもって神様を讃美するんです。「『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、／全能者である神、主、／かつておられ、今おられ、やがて来られる方。』」神様の方を見る目をもって、神様を讃美しているということなんです。どうでしょうか。

この姿は、まさに私たち信仰者のあるべき姿だと考えることが、実は出来ます。この地上で神様に生かされている。この地上に神様から遣わされている存在として生きていこうとする時に、実は二つの目を私たちは持たなければいけないと、ここで語られている。教えられているように思います。

それは、一つは地上をちゃんと見る目だ。世の中の状況、人々の状況、それは、ただ人間だけのことではないんですよ。これ、まさに自然界でしょ。他の生き物です。そういう存在も含めて、ちゃんと目を留めていく。見ていく目を持たなければならない。それはもちろんそうだとことです。

しかしそれだけじゃだめだよ。もう一つの目は、神様をいつも見ている目だ。神様の方を、神様はどういう思いをもっていらっしゃるのか。神様が何を考えていらっしゃるのかを、ちゃんと見ているその目なんです。

これは、どちらかじゃダメなんです。どちらかに偏ってしまうと、私たちはこの地上で生きていけないんです。神様を見ただけじゃ、この地上から浮いてしまいます。この地上を見る目だけだと、神様という思いがここから抜け落ちてしまいます。この両方の目を、いつもちゃんと持って、神様働いてくださいと、こんな厳しい辛い状況があるじゃないかと、ここに主よ、あなたが救いを与え

てくださいと祈り願い求めていく。憐れんでください。ここに聖霊を送ってください。あるいは、ここにこんな酷い状況があります。これは、裁かないんですか。このままにしておかれるんですか。そのように、私たちは祈り願っていく。

同時に、ここの四つの生き物がしているように、神様に対して讃美をしながら、地上の状況を見ながら神様を讃美していく。礼拝を捧げていく者として、生きていくんだという事ではないでしょうか。そのことを改めて教えられる箇所でありました。

お祈りを致します。

天の神様、こうしてまた礼拝を捧げられますことを感謝いたします。

どうぞ、私たちが今週も元気に過ごせますように。

あなたを見上げながら、そしてそれぞれの置かれている状況、足元、また、行く先、身の回りのこと、隣人や家族のことを、ちゃんと目に留めながら、一人ひとりと共に生きていく、生き方を与えてください。

単に人間だけでなく、この世界、この地上、天と地を本当に見ながら、そこにあなたが何を望んでおられるかを考えながら、生きていくことができますように導いてください。

この悲惨な状況があります。

世界は本当に病んでいます。先が見えないような状況が続いています。

どうぞこの時こそあなたが、救いの力を及ぼしてくださいますように。

聖霊を注いでくださいますように。

御名によって祈ります。

アーメン